

う膜炎を惹起した。肉眼的に炎症が前部ぶどう膜から後部ぶどう膜に波及する所見に対応する VFP の測定結果が得られ、実験的ぶどう膜炎の炎症強度を VFP が評価しうることが示唆された。

8. 血中タイコ酸抗体測定の臨床的意義について

(臨床中央検査部) 大井 聖至・清水喜八郎

目的：タイコ酸はグラム陽性菌にのみ存在する細胞表面物質であり、全身性の黄色ブドウ球菌感染症でその血中抗体が上昇することもあると言われており、その臨床的意義について検討した。

方法

各種細菌感染症より採取した血清にて Gel diffusion (GD) の Ochterlony 法, counterimmunoelectrophoresis (CIE) でタイコ酸抗体を測定した。

成績

CIE では 8 倍希釈以上, GD では 2 倍以上を陽性とし, CIE では黄色ブ菌敗血症の例中 1 例, GD では黄色ブ菌心内膜炎 1 例中 1 例, 敗血症 9 例中 2 例が陽性であった。抗酸菌感染症についても検討し, CIE, GD で結核 82 例中 1 例のみが陽性でこれは粟粒結核の症例であった。類では CIE で 152 例中 25 例, GD で 28 例が陽性であった。類の病型別の陽性率を GD でみると類腫型の 46.2%, 境界型の 16.1% が陽性であり, 未定型, 類結核型では陽性例はなかった。

考察

血中タイコ酸抗体の測定は黄色ブ菌心内膜炎, 敗血症の診断に, ときに有用につかひ得る。それ以外に抗酸菌感染症とくに日和見感染としての結核菌感染あるいは類の病型判定に利用できる可能性もある。

9. インターフェロンによる造血幹細胞・増殖に対する抑制効果

(第一内科)

山田 修・押味 和夫・溝口 秀昭

目的

インターフェロン (IFN) 治療の副作用の 1 つとして貧血, 白血球減少, 血小板減少などが経験されるが, 遺伝子工学で得られた γ IFN を用い, その造血幹細胞に対する作用を検討した。

方法

健康成人骨髓血より有核細胞を分離し, 軟塞天単層法により CFU-C アッセイを, プラズマクロット法により CFU-E アッセイを行なった。各ディッシュには γ IFN をそれぞれ, 10, 100, 200, 400, 1,000U/ml の濃

度で加え, 37°C 5%CO₂ で 7 日培養後コロニーの観察を行なった。さらに, あらかじめ培養系からマクロファージを除去しておき, その影響も調べた。

結果

CFU-C, CFU-E とも添加 γ IFN の濃度依存性に抑制された。その程度は CFU-E で大であった。マクロファージの依存の有無での γ IFN の抑制効果は影響を受けなかった。

考察

γ IFN は CFU-E を CFU-C より強く抑制することがわかった。またその抑制作用にはマクロファージの関与がないと思われた。

10. 無担体連続電気泳動装置を用いた 4 時間培養 MLR の検討

(腎センター・移植免疫研究室)

安尾美年子・早坂勇太郎・高橋 公太・東間 紘・太田 和夫

腎移植の際の組織適合性検査として最も重要と考えられるリンパ球混合培養 (MLR) は培養から判定までに約 1 週間必要であり, このため屍体腎移植では術前の検査が不可能である。

一方, マックスプランク研究所の Dr. Hannig らは 3 時間培養 MLR の上澄で処理した羊赤血球指示細胞を用いてその電気的易動度と MLR の強さとの相関性を報告している。

その実験によれば羊赤血球指示細胞の電気泳動易動度は control と比較した場合に従来の MLR で刺激を認める場合には増加し, 刺激を認めない場合にのみ等しくなる。

今回我々は Hirshmann 社の ACE 710 型チャージセルアナライザーを使用して 4 時間判定の MLR を検討した。培養条件が最適ではなかったため十分な結果は得られなかったが, 自己と非血縁との反応に差がみられた組もあり, 今後その原因となるメディエーターについても検討する予定である。

11. 全身性アミロイドーシス剖検例：特に AA アミロイドーシスと AL アミロイドーシスの検討について

(第二病理) 豊田 充康・佐藤 昭人・森本紳一郎・梶田 昭

我々は第 73 回病理学会で, 全身性アミロイドーシスの剖検 7 例を KMnO₄ 前処理法および酵素抗体法 (抗 AA 抗体) を用いて, AL アミロイドーシスと AA アミロイドーシスに分類した。今回さらに症例を追加して

16例とし、心、腎、脾を用いて前回と同様に KMnO_4 前処理法および酵素抗体法(抗AA抗体)によりAAアミロイドーシス6例、ALアミロイドーシス10例に分類した。その後脾切片を対象として、抗ヒトIgG(γ)、抗ヒトIgA(α)、抗ヒトL鎖(κ 型)、抗ヒトL鎖(λ)型(DAKO社)を用い酵素抗体法(PAP法)による検索を行なった。その結果、IgGはALアミロイドーシスがAAアミロイドーシスよりも多く、IgMおよびIgAはAAアミロイドーシスとALアミロイドーシスの間に著明な差は認められなかった。Light chainではKchainおよび λ chainはALアミロイドーシスがAAアミロイドーシスより増加していた。ALアミロイドーシスにおいては κ chainと λ chainに著明な差は認められなかった。

12. 家兎腎培養メサンジウム細胞に対するモノクロナール抗体の作製—その活性の特徴—

(腎センター小児科)

川口 洋・伊藤 克己

糸球体腎炎および各種の実験腎炎の発症に腎内抗原の関与が考えられている。今回われわれは、家兎腎培養メサンジウム細胞を用いて、その抗原性を検討するためにモノクロナール抗体を作製した。

方法

家兎腎から糸球体を単離し、組織培養を行ない、メサンジウム細胞を得た。この107ケミBaeb/cマウスに2回免疫し、最終免疫3日後に、Köhler & Milsteinらの方法に準じてP3-X63-Ag8、653のMyeloma株を使用してHybridomaを作製し、2回の限界希釈法にてモノクロナール抗体を得た。これを使用して、腎および他組織、メサンジウム細胞との結合を検討した。

結果

本抗体(KI₂-B)は、主として腎メサンジウム領域および浮遊メサンジウム細胞と結合した。またメサンジウム細胞に対してcytotoxicityを有していた。現在、本抗体による腎炎を作製し、また抗原を同定している。

13. 自己免疫性肝炎患者の免疫遺伝学的解析

(消化器内科) 栗原 毅・山内 克己・
中西 敏巳・小幡 裕

すでに本談話会で、自己免疫性肝炎とHLA-DR4が相関することを述べているが、今回は家系調査さらに自己免疫性肝炎におけるHLA-DR座抗原を介した免疫応答機能につき検討した。家系調査の結果患者と同一なhaplotypeを有する女性には高率に免疫異常が存在し、これら免疫異常を認めた例では高頻度でDR4

を有していた。これらの事実から、自己免疫性肝炎患者にはDR4を介した免疫反応系に何らかの異常があるものと考え、T細胞が自己の非T細胞表面のDR抗原を認識して増殖する自己リンパ球混合培養反応を測定した。その結果、自己免疫性肝炎群では有意にこの反応が低下しており、その原因がT細胞側にあることが、患者とHLA identicalなhealthy siblingのT細胞、非T細胞の種々の組み合わせにより判明した。

14. ベーチェット病患者3例へのサイクロスポリンAの使用経験

(眼科) 若月 福美

今までコルヒチン、免疫抑制剤等の治療法でも眼症状の発作を抑えることのできなかった難治性ベーチェット病3例に対しサイクロスポリンA療法を施行し、免疫学的検査を行ない、その作用機序に関し検討した。

方法

サイクロスポリンAを約10mg/kg/day内服投与を行ない。投与前、投与開始後2週目、4週目、その後4週毎に眼科的検査、血液検査を施行した。

結果

3症例6眼共に視力の改善を認め、眼発作の回数も減少した。また、1例のみにT cellの一過性減少を認めたが、OK T4/T8は特に著変はなかった。

考察

今まで言われてきた様なT cellの関与は、今回の免疫学的検査では明確にはならなかったが、眼発作回数の著明な減少、視力の向上等の臨床症状の改善が認められたため、難治性ベーチェット病の眼症状には有効な薬剤としての評価が高く、今後、症例数を重ね長期例の観察を行なっていく予定である。

15. モヤモヤ病における自己免疫抗体の検索

(脳神経外科)

鰐淵 博・加川 瑞夫・井沢 正博・
氏家 弘・竹下 幹彦・青木 伸夫・
佐藤 和栄・喜多村孝一

(神経内科) 丸山 勝一

モヤモヤ病の初期変化と考えられる内頸動脈終末部の狭窄性変化の原因と1つとして、自己免疫抗体の関与を指摘する意見もあるが、臨床例の報告は少ない。我々は抗DNA抗体陽性を示し、脳血管撮影にて左内頸動脈完全閉塞のモヤモヤ病の疑診症例1例を経験したので報告する。併せて最近経験したモヤモヤ病12症例の自己免疫抗体の検索を行ない、モヤモヤ病の成因